

## 1 石棺研究が導いた実験航海

藤本：まずは、高木さんに事業の発案に至る経緯などについて、改めてお伺いします。

高木：長年にわたる石棺研究が一番のきっかけですね。研究を進める中で、九州外にも阿蘇溶結凝灰岩とみられる石棺が存在することを知りました。石棺研究で有名な岡山県倉敷考古館の館長だった間壁忠彦先生に「九州外の石棺は、どこで製作されたものですか」と尋ねると、「それはわからない。九州の人に是非調べていただきたい」と、逆に先生からボールを返されました。それにお応えする形で色々と石棺を調べる中で、関西地方や瀬戸内地方にある一部の石棺について、どうも宇土の馬門石製ではないか、宇土の石棺に何かつながりがあるのではないかと考えるようになりました。最初にそう思ったのは、岡山市の造山古墳でした。そして、それを追いかけていたら、似たものが大阪府藤井寺市の長持山2号石棺、あるいは岡山県瀬戸内市の築山古墳など、複数あることに気がしました。特に衝撃だったのは、長持山2号石棺を見た時です。灰色でもピンクでもなくベージュ色なんですけど、宇土市網津町馬門にある同色の馬門石によく似ているなど感じました。その後、岡山県で考古学の研究会があった時に、築山古墳を見に行きましたが、まさにピンク色の立派な石棺がありました。それを見て「やはり馬門石だ」という確信を得ました。

藤本：高木さんは宇土の出身なので、昔から馬門石が身近にあったというのが大きかったんでしょうね。

高木：これは縁だなと感じつつ、「自分が調べなければ誰が調べるんだ」という思いで研究を深めていきました。そしてある時、RKK熊本放送で「石の挽歌」というテレビ番組の取材がありました。この番組の取材の趣旨は、造山古墳の石棺を見て私に「阿蘇の凝灰岩だ」と言ってほしい。それを撮りたいという趣旨でした。同様に、地質学が専門の熊本大学の渡辺一徳先生には、自分（高木）とは無関係に大阪の藤井寺市に行ってもらい、長持山1号石棺を見て「これが阿蘇の凝灰岩だ」と言ってほしいというものでしたが、撮影終了後、渡辺先生が長持山2号石棺を指して「これも阿蘇の石です」と仰ったそうです。

藤本：ピンク色をした方ですね。

高木：先生の発言に対して、そこに同席されていた藤井寺市の学芸員の方が反論したそうです。「そんなことはありません。これは二上山（大阪府と奈良県の境にある山）のピンク石です」と。

藤本：その頃はそれが定説でしたからね。

高木：その後、番組の試写会に呼ばれる機会がありました。午後から試写会という日の午前中、築山古墳と長持山2号石棺の破片を渡辺先生の研究室に持ち込み、見てもらいました。渡辺先生とはそれが初対面でした。これは宇土の馬門石ではないかと思っている旨を伝えると、渡辺先生も「おそらくそうでしょう」と。肯定の言葉をいただきました。では、2人で詳しく調べて、学界に発表しましょうという話になった。それから、渡辺先生の研究室に頻繁に足を運び、サンプルの作り方や顕微鏡での屈折率の測り方など、石材の分析方法を教えていただきました。そうした分析で確証を得て、考古学関係の研究誌に論文を発表したこと

【対談】“古代と海への挑戦”を振り返る（大王のひつぎ実験航海 20 周年記念）

で、本格的に学界の知るところとなったわけです。

藤本：その当時、関西や岡山のピンク色の石棺材は、二上山ピンク石製だと思われていたので、阿蘇の石だと言っても賛同されない方もいらっしやったのではないですか？

高木：ほとんど否定的でした。僕が石棺の研究者であることは知られていましたが、よりによって、その出身地である宇土の石という論なので、無理やり地元と結びつけているのではないかという不信感があったように思います。邪馬台国の推定地を自分の地元ありきで話をするのと似たようなイメージです。そんな中、大学の著名な考古学の先生にこの話をする機会があり、賛同していただいたのは大きかったです。そのうちのひとりの方からのすすめがあり、1990年に論文（「石棺研究への一提言」『古代文化』42-1）を書きました。

藤本：本当に画期的な論文でしたね。私はその5年後くらいに大学で考古学を学び始めましたが、私の学生時代にはすでに高木さんの研究を知っていたくらい、古墳時代を学ぶ者にとっては有名な研究でした。

高木：この時苦労したのは、顕微鏡を見たり、慣れない理化学的な分析をしながら渡辺先生と共著という形で論文をまとめることでした。

藤本：考古学の研究者と理化学的な分野の研究者が共著で論文を書くというのは、当時から珍しかったのではないですか。

高木：あまり無かったですね。

下川：蛍光エックス線の屈折率を測ったりするんですよね。

高木：そうです。そのような分析を、渡辺先生に大学でやってもらいながら進めた研究でした。

藤本：考古学では、モノの形とか型式の変化といったものに着目し、研究を進めますが、そこに理化学的な裏付けが取れているという点が強みですね。石材の産地同定などは、そういった裏付けが無いとなかなか信じてもらいにくく、恣意的に論を展開しているように受け取られかねないですからね。そういう意味で、誰も文句が言えないような研究成果でした。

高木：最初に言い始めた時は「あり得ない」という反応がほとんどでした。特に関西の研究者からは。本当に宇土の石が運ばれているなら、地元にも似たような石棺があるはずなのに、1例も見つかっていないじゃないかと。そんな感じでなかなか認めてもらえない中で、少しずつ風向きが変わっていきました。そこには、関西の古墳研究の第一人者である先生方に認めてもらえたことが大きいと思います。一方で、僕の意見に反対の立場で自ら関係する石材を分析する研究者も出てきました。当初最も激しく反対されていた方が、独自の研究の結果、馬門石が近畿に運ばれていることに間違いは無いと認めてくださり、学界全体の流れが変わっていきました。馬門石の石棺研究が進み、実験航海へつながっていった要因として、やっぱり渡辺先生との出会いが大きかったと思います。

藤本：その中で、元々世に知られていた石棺だけでなく、発掘調査で新たに発見された、大阪府高槻市の今城塚古墳や奈良県橿原市の植山古墳の存在は、研究を進めるうえで大きかったのではないですか。

【対談】“古代と海への挑戦”を振り返る（大王のひつぎ実験航海 20 周年記念）

高木：そうです。ただその頃には、発見された当初から、これは馬門石ではないかと言われるくらいに、馬門石製石棺のことは学界に浸透していました。植山古墳石棺が発見（2000 年）された時、橿原市の調査担当者からすぐに連絡があって、馬門石の石棺が発見されたのですぐ来てくれと。ほぼ間違いなく馬門石だと考えているが、あなた（高木）が見てから発表すると言われました。要は馬門石に詳しい方に「間違いはない」と太鼓判を押してほしいと。

藤本：すごく立派な石棺ですよ。私も発見から何年か後に現場を見に行きましたが、石棺の稜線などがすごくシャープで。おそらく古墳が完成してからあまり時間をおかずに埋まってしまったから状態が良いのだと思ったのですが、まるで最近作られたかのようなきれいな石棺でした。

高木：植山古墳の被葬者である竹田皇子（推古天皇の息子）は、推古天皇と合葬された後、大阪にある古墳に改葬されたといえます。改葬にあたって皇子の遺骨を取り出す時に石棺が開けられ、おそらくその時に蓋が割れたのだと考えられています。そして、遺骨を取り出した後にすぐ埋めたため、きれいな状態で保存された。つまり、古墳時代には既に埋められていたと考えられます。

藤本：石室に安置されてから埋まるまで、ほとんど時間が経っていない。だからあれだけきれいな状態で発見されたんですね。

高木：そういう意味で、残り具合が一番良い石棺と言えます。

下川：そういうものが残っているというのはすごいですね。

藤本：あと、今城塚古墳での馬門石製石棺の発見（1998 年）の経緯もすごいですよね。

高木：現在、継体大王の墓でほぼ間違いないと考えられている今城塚古墳ですが、当時、高槻市が発掘調査を行っていました。森田克行さん（高槻市文化財課長、高槻市立今城塚古代歴史館館長、同館及び高槻市立しろあと歴史館特別館長を歴任。現在、高槻市文化財アドバイザー）らが行った試掘の段階で、既に馬門石らしき破片が出土しており、今城塚古墳に馬門石製の石棺が納められていたことはほぼ確実とみられていました。しかし、破片だけでは必ずしも石棺の破片と断定できず、またピンク色の竜山石なども存在するため、確証に欠ける状態でした。そこで、良かったら見に来てくれないかと声がかかり、森田さんの案内で現地を訪れました。結局、森田さんに案内されて墳丘を見た時には石棺の破片は見つかりませんでした。森田さんと別れた後、もう一回現地を見たくて今城塚古墳に行ったところ、後円部の墳丘上で馬門石製石棺の破片を拾ったんです。真っ赤に塗られた、家形石棺の蓋だと思います。

藤本：私も見たことがあります。赤色顔料が塗られた石棺片でした。

高木：結果として、この発見によって今城塚古墳に馬門石の石棺が納められていたことが確定しました。